
流れる娘

ぼーず平野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れる娘

【Nコード】
N0275Q

【作者名】
ぼーず平野

【あらすじ】
私は何処から来て何処へ行くかとしているのか。娘は何処から来て何処へ行くかとしているのか。

何の音も聞こえない夜の海である。周囲は霧に閉ざされていて、島ひとつ灯りひとつ見えない。肌寒いほどの湿った空気が、濃密な黴臭さを伴って、私の顎を撫でてとる。私の小舟の下に、はち切れそうに湛えられた黒い水の、ビロードのような滑らかな波が静かにうねる。

私の帰るべき場所はどこだろう。

私は夢中で櫂を繰る。

何処から来たのか、不意に霧の中から市松模様の着物を来た娘が現れ、流されてゆく。帯が解けてつばみのような躰が、霧を分けるように差しこんだ暗い満月に照しだされる。月光は美しい生贄を舐めるように、躰の奥まで残酷に覗きこむ。長い髪の下の端正な顔が半分水に浸かったまま、なかば開いた唇の隙間から、どす黒い潮水が容赦なく出入りしている。鴉色の羽二重餅のような小さな乳房の下を、暗黒の触手が底知れず渦を巻く。少女は小指ひとつ動かさない。もう死んでいるのであるとか、表情もない。ただ娘の目だけがじっと私を見ている。その長いまつげの奥の眸に、どこか見覚えがある。

あれは確か……。

私は舟を漕ぎ寄せて、娘の手を引こうとする。

私は懸命に手を伸ばす。しかし舟と娘の距離は縮まらず、次第に遠くに流されてゆく。娘は動かない。娘の目だけが、流されるなり

に、遠くなっても私をじつと見ている。霧の中で目だけが、恨むように、訴えるように、いつまでも見ている。

突然、娘の人形のような眸の奥から一掬の涙がこぼれ、やがてピロードに溶けて広がってゆくのを、確かに私は見た。

その涙は、まるでべっこう飴のような甘い香りを、夜の闇に溢れさせる。甘い甘い、咽ぶほどの香りに、私は気絶しそうになる。

今でもその娘が誰であったのか、想い出せそうに想い出せない。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0275q/>

流れる娘

2011年1月13日06時46分発行